

## 薩摩川内市樋脇町藤本周辺の植物

桐野 秀信<sup>1</sup>・篠崎 チサ<sup>2</sup>

### Flora of Fujimoto, Hiwakichyo, Satsumasendai city

Hidenobu KIRINO<sup>1</sup> and Chisa SHINOZAKI<sup>2</sup>

キーワード：植物目録，植生調査，植物相，絶滅危惧種

#### はじめに

薩摩川内市樋脇町市比野の藤本地区は八重山に連なる八重高原，三方塚山，中岳，湯牟礼山等に囲まれた山間にある。地区内には植物化石を産する珪藻土採掘場もある。

近隣の八重山，入来峠，重平山，そして藺牟田，冠岳などの植物分布に関する報告は，いくつかあり，これらの地域からはかなりの数の注目すべき植物についての報告がある（土井，1938；初島，1964）。

しかし，本地域からは，鹿児島植物同好会（1986，

1987）や立久井昭雄（1992）などわずかの記録しかない。

筆者は平成25年8月から平成28年10月までの間に本地域の植生調査を実施し，絶滅危惧種などの特筆すべき植物の分布を確認できたので報告する。なお調査で収集した標本は，鹿児島県立博物館に保管してある。

#### 1 薩摩川内市藤本の地形・地質について

八重山は最高点が676mであり，三方塚山を交点として南側の上宮岳方向に伸びる尾根，東側の八重山方向に伸びる尾根，北側の八重高原台地に伸びる方向の3つに区分できる。この地域は，後期新生代に噴出した火山岩類とそれらの間に挟まる泥岩や凝灰岩などの



図-1 樋脇町藤本周辺位置図（国土地理院電子国土 Web より）

1 〒891-0109 鹿児島市清和3-2-20  
2 〒890-0082 鹿児島市紫原5-36-14

堆積岩類により構成されていて、往時の活発な火山活動の痕跡を残す複雑な地形をしている。調査地の薩摩川内市藤本地区は、行政区分上は、薩摩川内市樋脇町市比野菖蒲ヶ段、上藤本、大平および薩摩川内市入来町浦之名岩下、八重となる。本地域は、標高およそ200m～500mで、泥岩や凝灰岩層の上に火成岩層が重なっている。火成岩層は、玄武岩質から流紋岩質と様々である（内村ら、2007）。

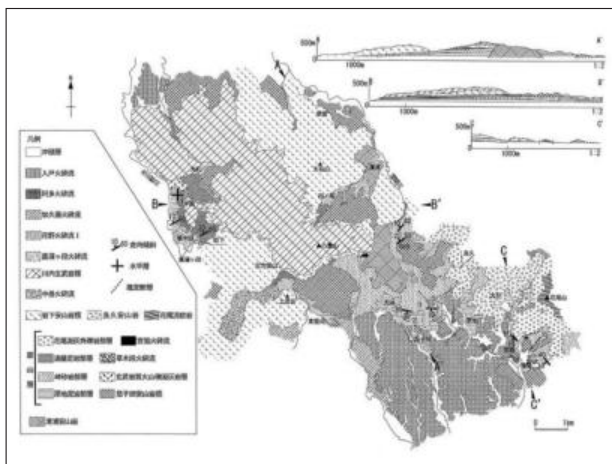


図-2 八重山周辺地質図および地質断面図（鹿児島県八重山地域の地質と鮮新統郡山層の層位学的研究論文より）

## 2 調査地植物相の概況

### 2.1 菖蒲ヶ段および岩下地区の植物相

両地区は隣接し、急斜面を開いて作られた棚田と点在する人家、そして人家周囲の畑、竹林（モウソウチク、ホテイチク、カンザンチク）、針葉樹林（スギと少しのヒノキ）で構成される。八重山から市比野川の支流が何本か流下している。耕作放棄地が目立ち、山林も手入れが行き届いていない。

田の周囲では、セトガヤ、ノミノフスマ、ゲンゲ、イガトキンソウ、オオツメクサ、コメツブツメクサ、スズメノカタビラなどが生育する。畦畔や側溝にはクサイ、クサヨシ、アメリカフウロ、ニワゼキショウ、オニノゲシ、ノチドメ、カタバミ、スイバ、ヒメジョオン、スズメノヤリ、ミゾカクシ、ヘビイチゴ、トウバナ、キランソウ、ヒメコバンソウ、カモジグサ、ノアザミ、ヤブジラミ、ハハコグサ、サツマシロギク、リンドウ、ヒガンバナなどが確認できた。数は少ないが、アキノキリンソウ、ヒメノボタン、ヤマラッキョウ、コシオガマ、オミナエシ、アカバナ、ナンゴクカモメヅル、サワオグルマ、コキンバイザサなどもある。

畑では、ナズナ、アオビユ、ヨモギ、オオアレチノ

ギク、ホトケノザ、スギナ、ツユクサ、マルバツユクサ、センダングサ、マメアサガオ、シロザ、チガヤ、セイタカアワダチソウ、イヌアワなどがある。周囲にはカナムグラやクズなどが繁茂する。帰化植物の侵入が増えてきているが、都市近郊ほどではない。

八重山から流下する小川のほとりにはセキショウ、ジュズダマ、シンラネセンキュウ、ジュズスゲ、ヒメレンゲなどが生育する。オオイワヒトデも多い。栽培逸出と思われるがチマキザサ、オランダガラシ、アルストロメリアなどが根付いているところもある。



図-3 藤本地区麓より岩下の岩を見る

### 2.2 藤本滝周辺の植物相

菖蒲ヶ段と上藤本の上に落差30mの二段滝がある。滝の周囲にはシダ類が繁茂している。地域の公園として整備が進められている。滝壺入口斜面にツクシネコノメソウ、ナンゴクホウビシダがある。沢沿いの樹下にオオバノトンボソウ、キンラン、イチヤクソウ、ケムラサキニガナ、ナガバハエドクソウなどが見られる。シイ・カシ類も多種ある。（コジイ、アラカシ、ウラジロガシ、シリブカガシ、イチイガシ、アカガシ、ツクバネガシ、ハナガガシ）。ハナガガシは絶滅危惧種に指定されているが、公園整備の際に大木1本が伐採された。



図-4 藤本滝を下流より見る



滝の周囲には、イブキシダ、オオイワヒトデ、ヒトツバイワヒトデ、シンテンウラボシ、サイゴクホングウシダ、シロヤマシダ、ベニシダ、ヤブソテツ、オオカナワラビ、コクモウクジャク、オオバノハチジョウシダ、フモトシダ、シシラン、ヒメイタチシダ、ハイホラゴケなどがある。滝右岸上部には弱溶結火砕流たい積物層があり、そこにエダウチホングウシダ、スジヒトツバ、オオカグマ、コハシゴシダ、ヒメハシゴシダ、シャクジョウソウ、サルナシなどがある。カンザブロウノキ、シイモチ、タニワタリノキ、カカツガユ、タラヨウ、イスノキ、サカキ、カゴノキ、ヤマザクラ、エゴノキなどの樹木もある。

### 2.3 岩下林道および「岩下の岩」山頂周辺の植物相

八重山高原は現在、鹿児島大学農学部附属牧場及びゴルフ場として整備されている。岩下からゴルフ場までは落石が多く、荒れているが、車が通れる林道がある。その林道沿いには、ツクシスミレ、フモトスミレ、コタチツボスミレ、ナガバタチツボスミレ、コスミレなどが見られる。またアケボノソウ、ナガバノヤノネグサ、ホウライカズラ、シンミズヒキ、サンショウソウ、オオサンショウソウ、ヤマネコノメソウ、モロコシソウ、キジョラン、ヒメチドメ、オオバチドメ、ヒメナベワリ、ボタンヅル、ミヤマノコギリシダ、マテバシイ、カラスザンショウ、アマクサギ、カンコノキ、クストイゲ、クスノキ、ウラジロガシ、スダジイ、アカガシ、ヤブニッケイなどが見られる。林道沿いに国有林があり、かつては、ここのカシ類で盛んに炭が焼かれていた。現在はスギやヒノキの針葉樹が植林されている。



図-5 岩下の岩上部より下部を見る

岩下集落の後背地には、地元で「岩下の岩」と呼ぶ八重山高原からの巨大な岩塊がせりだしている。頂上

付近は標高500mほどで、マテバシイやスダジイが多い。岩盤の上は土壌が少ないためか根がこぶ状になり、浮き上がっている。アカマツも数本立っているが、広葉樹に囲まれ樹勢が弱くなってきている。この頂上付近にはその他にネジキ、ヤマツツジ、マルバアオダモ、タイミンタチバナ、シャシャンボ、イスノキ、モッコク、サカキ、タブノキ、ネズミモチ、ハイノキ、ヤマザクラ、ムラサキシキブ、クロキ、マルバウツギ、イズセンリョウ、マンリョウなどの木本類、イワヒバ、カタヒバ、シノブ、ギンリョウソウなどの草本類がみられる。シカの食害を受けた樹木が目立ち、樹皮をはがされた木が目立ち、林床の草本類は少ない。



図-6 入来牧場下の南西斜面を見る

### 2.4 岩下<sup>こぎ</sup>午除林道および入来牧場下の南西斜面林内の植物相

岩下から薩摩川内市藤本の午除まで標高200mから400mくらいの八重高原南西山腹沿いに林道が通っている。この地域はミミズバイースダジイ群落として位置づけられる二次林およびヒノキ、スギの植林地となっている。林道沿いではオオイタチシダ、ナガバノイタチシダ、リョウメンシダ、ナチシダ、ホラシノブ、カツモウイノデ、イノデ、クマワラビ、ヤワラハチジョウシダ、キヨスミヒメワビ、ナガサキシダ、コモチシダ、ハチジョウカグマ、コクモウクジャク、ナンゴクカモメヅル、トラノオスズカケ、ツルニンジン、オオルリソウ、コキンバイザサ、クモキリソウ、タシロランなどの草本類、アラカシ、コジイ、スダジイ、タブノキ、ホソバタブ、クリ、ハクサンボク、クマノミズキ、カラスザンショウ、アカガシ、トキワガキ、ナナメノキなどの木本類、マタタビ、シマサルナシ、テイカカズラ、カギカズラなどのつる植物などが見られる。



図-7 南西斜面に見られるコキンバイザサ

この林道から入った入来牧場近くの尾根筋は、わりあい平坦な地形でここでは、林床にフデリンドウ、フモトスミレ、アカネスミレ、キジョラン、イワガラミなどがあるが総じて貧弱である。木本類は、スダジイ、カゴノキ、イヌガシ、クスノキ、ヤマザクラ、シロダモ、クロキ、ヤマハゼ、エゴノキ、ヒサカキ、シャシャンボ、ヤブコウジ、イズセンリョウなどがある。ここは、かつてはアカマツ林で、樹下にはススキやオミナエシが多く、8月の墓参時の盆花の採集場所となっていた。アカマツは、数本残っているがどれも樹勢が衰えてきている。他の樹種でも立ち枯れが多い。シカの角研ぎのために樹皮がはがされた木も目立つ。昼間にもかかわらず調査中に何度もシカを目撃した。



図-8 入来牧場付近の尾根沿いの林層

### 2.5天狗岩周辺の植物相

藤本滝の下流3kmほどの市比野川右岸に角礫凝灰岩の岩峰、天狗岩はある。鹿児島植物同好会は、1987年5月に植物観察会で当地を訪れ、以下の植物の観察を報告している。



図-9 天狗岩を県道36号線より見る

ヒメカナワラビ、ヒトツバイワヒトデ、タカノハラボシ、ウツギ、ミサオノキ、オオコマユミ、オオバウマノスズクサ、マルバテイショウソウ、ヤマムグラ、ツクスミレ、ヒメレンゲ、マメヅタラン、ホソバヒカゲスゲ、ヤマアゼスゲ、ナルコスゲ、ムギラン。

今回の筆者の調査で確認できたのは、草本類では、ヤマイトチシダ、ヒメカナワラビ、コバノカナワラビ、ホソバカナワラビ、カツモウイノデ、マツザカシダ、クリハラン、オオイワヒトデ、ヌカボシクリハラン、ヤリノホクリハラン、ナンゴクホウビシダ、マメヅタ、ナガバノイトチシダ、イワヒバ、カタヒバ、シロヤマゼンマイ、フユノハナワラビ、ナチシダ、タチシノブ、オオカナワラビ、フユイチゴ、コ克蘭、トラノオスズカケ、オモト、オオイタビ、シュンラン、テイカカズラ、ナキリスゲ、ススキ、サツマイナモリ、アオツヅラフジ、アカネ、セキショウ、ハナミョウガ、セントウソウなど。木本類では、アラカシ、カラスザンショウ、シロダモ、イズセンリョウ、スダジイ、イヌビワ、クスドイゲ、タブノキ、ヤブツバキ、クスノキ、バリバリノキ、マテバシイ、イスノキ、アオキ、タラヨウ、シャシャンボ、オオコマユミ、シリブカガシ、ハクサンボク、モッコク、ミサオノキ、サザンカ、イヌガシ、マルバウツギ、ネズミモチ、タイミンタチバナ、ヤマビワ、ナンテン、クマノミズキ、ツルグミ、リンボク、コジイ、ノイバラ、ヤマハゼノキ、タニワタリノキ、イロハモミジ、ムベ、ヤマフジ、アケビ、サネカズラ、ウドカズラなど。ここもヌタ場など動物の痕跡が見られるが、他地域よりも下草は多く残っている。



### 3 確認した植物について

表1に確認した種数、表2に確認した植物の一覧を示す。

植物の学名・科名等は、「日本維管束植物目録 北隆館」(米倉, 2012)に従った。科の中では、属、種は全てアルファベット順に配列してある。

雑種分類群については、正式に発表された二名法の学名をもつものについては非雑種と同じに扱い、それ以外は両親種をアルファベット順に×で接続した雑種式で示してある。

属名はその中で最初の種のみ全体表示し、後は頭文字のみに略す。

帰化植物、栽培逸出植物等は、備考に表示する

表1 確認した種数

	科数	属数	種数
シダ植物	21	46	105 変種 4 雑種 2
裸子植物	3	3	4
被子植物	120	378	581 変種 7 雑種 2
総計	144	427	690 変種11 雑種 4

### 4 分布上注目すべき植物

#### 4.1日本の絶滅する恐れのある植物

(環境省レッドリスト植物)

絶滅危惧植物のランクは環境省の表示になら以下のように略記する。EX:絶滅, EW:野生絶滅, CR:絶滅危惧I A類, EN:絶滅危惧I B類, VU:絶滅危惧II類, NT:準絶滅危惧。

- ① ハヤトミツバツツジ, ツツジ科 (CR, 鹿児島県は危惧I), 図-10

落葉の低木。斜面の林縁などに生育。本地域では、かつては凝灰角礫岩の尖塔周辺に多数生育していたが、現在は自生品はほとんどない。

- ② ヤワラハチジョウシダ, イノモトソウ科 (EN, 鹿児島県は準危惧種), 図-11

樹林下に生える。林道路傍と川沿いのスギ林の林床で確認。本地域内に点在する。

- ③ キリシマエビネ, ラン科 (EN, 県危惧I), 図-12

林床に生育する常緑の地生ラン。県内には散在的に分布するが個体数は少ない。

- ④ キエビネ, ラン科 (EN, 県危惧II), 図-13
- 林内に生育する常緑地生ラン。

- ⑤ カンラン, ラン科 (EN, 県危惧I)

常緑広葉樹林下に生える地生ラン。徹底的な園芸採取により希少種になっている。本地域では八重寒蘭と呼ばれる採取・栽培品が知られているが、栽培品の多くは失われている。

- ⑥ ツクシアブラガヤ, カヤツリグサ科 (EN, 県危惧II), 図-14

湿地草原に生育する夏緑の多年草。九州南部に固有。紫尾山, 大口山地, 霧島山系, 新川溪谷, 蒲生, 鹿児島, 鹿屋に分布。林道路傍の湧水地に生育する。

- ⑦ アカササゲ, マメ科 (EN, 県危惧I)

畦畔にチガヤなどに混在してわずかに生育する。

- ⑧ ナンゴクカモメヅル, キョウチクトウ科 (EN, 県は危惧II)

明るい草原や林縁に生育する夏緑のつる性草本。九州南部, 種子島地域に固有。本地域の林道の路傍にはまだ相当数生育。

- ⑨ オオタニワタリ, チャセンシダ科 (VU, 県危惧II)

常緑のシダ植物でやや湿った山林中の樹幹, 岩上に着生する。県内に広く分布するが, 乱獲され急激に減少している。本地域にも多数の株が生育している林があったのだが, 今回の調査では自生の確認はできなかった。自生地近くの民家の栽培品のみが残っている。

- ⑩ キンラン, ラン科 (VU, 県危惧II), 図-15

夏緑の地生ラン。種子島が日本では南限。散在的にやや普通に分布するが, 個体数は少ない。本地域では群生しているところがある。

- ⑪ ナギラン, ラン科 (VU, 県NT), 図-16

常緑の地生ラン。林床に生育する。広く分布するが集団の個体数は少なく, 県内の生育地も著しく減少している。本地域ではまだかなりの個体数が残されている。

- ⑫ ガンゼキラン, ラン科 (VU, 県危惧II), 図-17

常緑の地生ラン。やや湿った林床や林縁に生育。かつては普通な種であったが産地が急減。午除竹林内等で開花株を確認。

- ⑬ ハナガガン, ブナ科 (VU, 県危惧II), 図-18

常緑の高木。山腹斜面の下部から平地に生育。四国・九州南部に固有で希少。点的に知られて

いるが、多くはない。滝の上方の川岸に1本を確認。滝のすぐ近くに大木があったが調査期間中に公園整備のために伐採されてしまった。

- ⑭ ヒメノボタン, ノボタン科 (V U, 県NT),  
図-19

草地や路傍草地に生育する夏緑の多年草。生育地が著しく減少している。本地域では、田の土手でチガヤなどに混じって生えている。生育地は狭いが、個体数はまだ多い。

- ⑮ マルバテイショウソウ, キク科 (V U, 県危惧I), 図-20

やや湿った林床に生育する夏緑の多年草。九州南部に隔離分布する希少種。本県では県西部及び北部に分布。林道の路肩の斜面に数株生育。天狗岩からも報告がある。

- ⑯ タシロラン, ラン科 (NT, 県V U) 図-21  
腐生の地生ラン。散在的で個体数も限られている。うす暗い落葉の多い林道路傍2か所で生育確認。

- ⑰ ボウラン, ラン科 (NT, 県分布重要)  
樹木に着生するラン。やや稀。産地減少。民家近くのカキノキの着生株を40年くらい前に採取、栽培されている一株のみを確認。

#### 4.2 鹿児島県の絶滅のおそれのある植物

(改訂鹿児島県レッドデータブック平成28年発行より) 危惧Ⅰ：絶滅危惧Ⅰ類(環境省評価CR+ENに対応する), 危惧Ⅱ：絶滅危惧Ⅱ類(環境省評価VUに対応する), 準危惧：準絶滅危惧(環境省評価NTに対応する)

- ① 危惧Ⅰ  
クモキリソウ (ラン科)  
サワオグルマ (キク科)  
マルバノホロシ (ナス科)
- ② 危惧Ⅱ  
アシカキ, アオミズ, ニガクサ, シャクジョウソウ
- ③ 準危惧  
ホソバトウゲシバ, ヒカゲノカズラ, フユノハナワラビ, オオバノアマクサシダ, リョウメンシダ, マツザカシダ, ハチジョウシダモドキ, ホソバシケシダ, ヤマヤブソテツ, キヨシミヒメワラビ, ヤマイタチシダ, ヒメイタチシ

ダ, ヒメカナワラビ, ヒトツバイワヒトデ, ツクシノキシノブ, イヌガヤ, ツクシショウジョウバカマ, シュンラン, シュスラン, オオバノトンボソウ, コキンバイザサ, ヤマラッキョウ, オモト, ヒロハノイヌノヒゲ, ヒメコウガイゼキショウ, ナキリスゲ, ノゲヌカスゲ, クサヨシ, イヌアワ, フジセンニンソウ, ヒメレンゲ, ジャケツイバラ, タヌキマメ, ヤブハギ, ミヤマトベラ, サルナシ, ヒメキンミズヒキ, ヤマブキ, ヤブイバラ, オオクマヤナギ, ナガバヤブマオ, イチイガシ, オオコマユミ, ツリバナ, ツチトリモチ, ナガバノヤノネグサ, ギンレイカ, イチヤクソウ, ミサオノキ, ヒロハコンロンカ, オオルリソウ, トラノオスズカケ, タツナミソウ, コシオガマ, ツルニンジン, ヒメヨモギ, センダングサ, ハイニガナ, シロバナタンポポ, オミナエシ, ウド, アワゴケ

- ④ 分布重要種  
アオカモジグサ, アカガシなど210種

#### 4.3 帰化植物および栽培逸出植物

判定は、「日本維管束植物目録」を参考にした。

コンテリクラマゴケ, ニガカシュウ, タカサゴユリ, シヤガ, ニワゼキショウ, ヤブカンゾウ, ニラ, ヒガンバナ, ノハカタカラクサ, クサイ, メリケンカルカヤ, ホウライチク, ヒメコバンソウ, ホテイチク, ジュズダマ, シナダレスズメガヤ, ホソムギ, アメリカスズメノヒエ, タチスズメノヒエ, モウソウチク, カンザンチク, ナギナタガヤ, オオナギナタガヤ, オニウシノケグサ, オカメザサ, ナンテン, メキシコマンネングサ, コセンダングサ, トウコマツナギ, コメツブツメクサ, シロツメクサ, ムラサキカタバミ, ハイニシキソウ, アメリカフウロ, オトメフウロ, コマツヨイグサ, ユウゲショウ, ヒルザキツキミソウ, マツヨイグサ, オランダガラシ, ヒメツルソバ, オランダミミナグサ, アオビユ, ヨウシュヤマゴボウ, ザクロソウ, ハゼラン, メリケンムグラ, ノアサガオ, マメアサガオ, アサガオ, ホシアサガオ, クコ, イヌホオズキ, マツバウンラン, タチイヌノフグリ, オオイヌノフグリ, アメリカアゼナ, ヤブチョロギ, キキョウソウ, セイヨウノコギリソウ, ケナシヒメムカシヨモギ, オオアレチノギク, ベニバナボロギク, ヒメジョオン, ハルジオン, ハキダメギク, チチコグサモ

ドキ、ブタナ、ナルトサワギク、セイタカアワダチソウ、アメリカセンダングサ、イガトキンソウ、オノゲシ、ホソバノチチコグサモドキ、ダンドボロギク、アカミタンポポ、マツバゼリ、ユリズイセン、ヒエ、チマキザサ、シキザキベゴニア

## 5 まとめ

平成25年8月から平成28年10月まで本地域を調査し、標本1068点を得た。そして本地域の野生植物144科427属690種を確認できた。

そのうち17種が環境省レッドリスト指定絶滅危惧種（絶滅危惧ⅠA、ⅠB、Ⅱ、準絶滅危惧）であった。また環境省指定と重ならない鹿児島県レッドデータブック絶滅危惧種（絶滅危惧Ⅰ類、絶滅危惧Ⅱ類、準絶滅危惧）は69種確認できた。国と県の指定を合わせると86種で、今回確認した690種の12%にあたる。

これは本地域がいわゆる山と里との境界地帯であることや高度が200mから600mと標高差が大きいことなどが原因と思われる。

帰化・栽培逸出植物は、80種を確認した。農作物と共に移入したと考えられるものが多い。園芸植物の逸出も見られた。最近30年くらいの間に定着した種も多い。当然のことながら、市街地ほど出現率は高くない。

## 6 おわりに

付近の山では、昭和30年代にはさかんに炭が焼かれていた。炭焼き窯の跡は今もたくさん残っている。その後、スギやヒノキの植林地が増えた。薪炭材の切り出された後の二次林は、まだ径の小さい木が多い。また15年くらい前にはいわゆるナラ枯れが目立っていたが、やっと回復してきた。しかし、シカやイノシシが増え、電柵が張り巡らされているにもかかわらず、人家のすぐ近くの田畑も頻繁に荒らされる。筆者の調査期間中、シカ8回、イノシシ2回、アナグマ1回を目撃した。林内はシカの角研ぎで樹皮をはがされた木が多く、林床や林道路傍の小草は、食害のためか少ない。またカヤ場の喪失によりオミナエシもほとんどない。さらに本地域は高齢者が圧倒的に多い限界集落であり、耕作放棄地も目立つ。モウソウチク林も手入れが行き届かず、荒れがひどい。希少植物の今後が案じられる。

週末には藤本滝や棚田を見学するボンネット観光バスが周遊してくる、この素晴らしい景観を永続的に維持するために、今後も計画的、定期的な自然調査を継

続し、地域住民と連携しながら本地域の自然の保護・保全の方策を探っていく必要を感じている。

## 謝辞

本調査研究の発表の機会と、多くの指導助言をいただいた久保紘史郎学芸主事や寺田仁志前学芸主事をはじめとする鹿児島県立博物館の皆さまに深く感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

- 内村廣大・大木公彦・古澤明(2007): 鹿児島県八重山地域の地質と鮮新統郡山層の層位学的研究, 地学雑誌第113巻第3号, p95-p112.
- 鹿児島植物同好会誌第9号(1987): 鹿児島植物同好会採集記録(June.1986 ~ July.1987), p87.
- 鹿児島県(2016): 改訂 鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 植物編.
- 環境省(2012): 環境省第4次レッドリスト 植物Ⅰ(維管束植物).
- 立久井昭雄(1992): 鹿児島県本土におけるスミレ類の自生状況, 鹿児島県立博物館研究報告第11号, p36-37.
- 土井美夫(1938): 薩摩植物誌, p75-76.
- 初島住彦(1964): 鹿児島の自然, 鹿児島県の植物, 鹿児島県理科教育協会編, p35-p40.
- 初島住彦(1986): 改定鹿児島県植物目録.
- 樋脇町史編さん委員会(1993): 樋脇町史上巻, p3-p38.
- 邑田仁監修, 米倉浩司(2012): 日本維管束植物目録, 北隆館.